
第一次パンツ戦争～仁義無き変態（おとこ）達の戦い～

やさきは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一次パンツ戦争〜仁義無き変態達おとしの戦い〜

【Nコード】

N5477M

【作者名】

やさきは

【あらすじ】

ごく普通？の高校生、健一がパンツだらけの町を歩く。そこで健一が見つけた物とは？

何でもありのスピード感溢れるコメディ！

パンツパンツパンティなストーリーです。スパツと読めます！

(前書き)

はじめまして。今回初投稿となります「やさきは」です。

変なストーリーで、文自体にもおかしな所があると思います。

いや、あります！（断定）

そしてもし、意見や感想があれば、お願いします。全力で喜んで見せます！

ちなみにこちらの小説、スピード感がたいへん速くなっておりますので、ご注意ください

「あゝかゝしゝろゝきゝいゝろゝ、きゝれゝいゝだゝなゝ」

……そう。今俺はそんなカラフルの目の前に立っているのだった。

見てよほら、綺麗に咲いてるじゃないか。

赤に白に黄色、その他沢山の色の　パンツ達が……しかも全部が男物……

しかもパンツ以外には何も無い　人もいない、音もない淋しい街角……

「……コンチクショウ、パンツなんて大嫌いだ……」

と、こんな風に愚痴ってる俺ですが、実は今迷子です。

可愛い女の子を追いかけて来た訳なんだけど……ちよつと反省。まあ、やめる気はないけどね。

それに……そうだよ。

あの子がいけないんだ！　可愛すぎるからいけないんだ！　ツイントールにミニスカとか罪だろ！

……えっ、おれ？　いや、違う！　ストーカーなんてしてないんだからね。ロリコンなんかじゃないんだからね。絶対にちがうんだからね！　あとツンデレでもないんだからね！

いやしかし、そんな事よりだ。一体ここはどこなんだ？

どこかに知っている場所はないだろうか？ と、俺は小さな期待を胸に周りを見回してみる。けどやっぱり知らない場所だ。

……………いやホントに、パンツパンツパンツって感じだな。ん？
何だあれ？

そこで俺の目に止まったのは、パンツの中では無駄に目立つ赤と黄色の長方形。

「これは看板かな？ え、なにになに……………」
『自分のパンツは自分で持ち帰ろう』

「……………って何それ!？」
有りなのか、そんな看板？ ……でも、周りを見ると間違っ
てないような気もするよな。うん、気のせいだ。…………でもやっぱり
有りなのか、そんな看板？

ああ、もうどっちでもいいや。

*

約十分後

「うおおおおおお!!!! パンティ見つけたああああ!!!!」

喜びと驚きが最高潮に達した俺が、年甲斐もなく叫んでいた。俺もう十七だから……。ちよっとはしゃぎすぎてしまった。

いやいや、そんなことはさておきスゴい。パンティはスゴい。

さっきまでパンツな気分だった俺をピンク一色に染めてくれたんだから。

命よりも大事な宝物候補としてすぐさまポケットに押し込み、さらに周りに誰もいない事を確認する。

そしてピンク一色な気分の俺は、色あせとりどりなパンツ畑をスキップで進んで行った。

体が軽く、飛べと言われたら本当に飛んで行けそうだ。

「アハハ、楽しいな。パンティさいこうだぜ」

*

それから十分程の時間が流れたが、俺はまだ迷っていた。

ちなみに今は憂鬱だ。

流石に誰もいない場所と言うのは淋しいものだ。

パンティパワーが切れてきたかな？

……ん？ おお！ 今俺のパンティレーダーに反応があああ！！
え？ パンティレーダーって何？ なんて質問は受け付けないぞっ、そして俺は女の子じゃないぞっ

……とにかく、この近くにパンティがある！ と思った俺は、再び周りを見渡してみる。
が、転がっている物から漂ってくるのは男臭だけだった。

深紅のベールを纏まとった『ボクサーパンツ』 真黄色に染められた『トランクス』 そしてパンツ全体の約五割を占めている純白の『ブリーフ』

……クソ、パンティは落ちてないのか。

……そういえば、さっきの場所よりも『白』が増えている気がする
ないでもない。

(このパンツ戦争、今はブリーフが優勢なのかな？)

『パンツ戦争』

説明しよう。パンツ戦争とは、パンツの種類ごとに別れて戦うと言っ、至ってシンプルなものなのだ。

なんで争っているのなんて知らない。
そして、シンプルが故に激しい乱闘となってしまうのだが……

やばいなあ。もうすぐ始まっちゃうんじゃないかなあ。

……早く帰るか。

と、思ったその時

「オラオラオラオラアアアアアアアアアア！」

ブリーフを股と頭に装着した変体（おとこ）が嵐のように俺の隣を駆けていった。

そして振り返った俺の目に飛び込んできたのは……

変態（おとこ）達のヌー顔負けの大行進。

おぞましい叫び声。

そして真っ白な股間と頭……

言ってみれば地獄絵図……

「……………ってなんでこっちに来るんだああああ！ 助けてえええええ！」

俺は逃げた。力の限り逃げまくった。今ならボルトと競つてもにも負けない気がする。目指せ百メートル八秒台！

そんなこんなである細い路地に吸い込まれるように逃げ込み

「イテッ」

「オラア！ お前どこにパンツつけて歩いとんじゃボケエ！」

あろう事か、変態と正面衝突してしまった。

「ふざけんな！ んなもんつけてたまるかあ！ だいたいブリーフかぶってるお前には『んだとオラア！』すみません。なんでもありません」

恐い人には逆らえないんだ僕。そして俺は僕っ子メガネちゃん的なヤツでもないぞっ

いやいやそんなことはどうでもいい。

俺がぺこぺこ謝っていると、変態（おとこ）はなぜか鼻をせわしなく動かし始めた。

うん、キモイ

「……なあ」

「へ、へい、何でしょう？」

あれ？ 俺は誰だ？

「お前、なんか臭わねえか？」

突然変な質問をしてきたので、「へ？」と首をかしげてしまう。

「だ〜か〜ら〜、臭うんだよ！ お前！」

「え？ 失礼ですねえ。これでも週3回、頭は週2回洗ってるんですよ」

と、自分のきれい好きをアピールする。

すると変態（おとこ）は、さっきの態度をガラリと変えてフレンドリーに話しかけてきた。

「なあんだ、お前もブリーフなんじゃじゃねえか。ははは、怒鳴ったりして悪かったな」

……………ブリーフなんて身につけた覚えはないんだけどな……………。

とりあえず優しくなってくれた事だし……………気にしない気にしない。

「いやあ、臭うってゆうのはよあ、そんなんじゃなくてさ……………その……………なんてゆうか、もっと変なヤツだ」

「ははは。なんだあ〜。分かってんじゃ〜ん」

コイツも漢（おとこ）なんだなあ〜

おそらくその匂いの根源である……………ポケットからしわの付いたパンティ取り出してヒラヒラとさせる。

すると「なっ……」と、変態（おとこ）が真っ青な顔と真ん丸の目でこちらを見てくる。

やっぱり分かるんだなあ。今のでお前の評価は、変態（おとこ）から、漢一とこに上がったぜ。ホントに良かったな。

「お、お前えええー!!」

真っ青だった顔を今度は真っ赤にして胸ぐらを掴んでくる。

信号機がお前は。

「なんすか？ 欲しいって言ってもあげませんよ」

「お前それをどこで手に入れたあ!!」

「どごつて……落ちてたんですけど、もう無いと思いますよ」

「なあぜ報告しなかったあ!!」

「え？ 報告？ なんでそんな事しなきゃならないんすか!？」

「はあ？ 何言ってるんだ？ 当たり前だろ!？」

「なんだか会話がおかしいなあ、と思い始めたんだけど………もう手遅れらしい。」

「チィ、仲間を殺るのは気が進まねえが……仕方ねえな」

俺は胸ぐらを掴まれていた手で体を押され、尻餅をついてしまう。

「や、殺るって何？ 俺ピンチ？ ピンチなの？」

「ふっ、まだ言うか。いくらパンツと叫んだってもう遅い！」

「ピンチって言ったよね、今！ どんだけパンツ思考なんだよお前は！」

「黙れオムニオが！」

「オムツなんてしてねえよ！」

しかし、俺の言葉には耳も貸さず、変態（おとこ）がブリーフの中から竹刀を取り出した。

「……竹刀？ サイズ的におかしくないか？ 実は四次元ポケットなのかそれは？」

「お前の疑問にはいずれパンツ王が答えて下さるだろう。……さらばだああああ！！！」

「え？ まじ？ あ、ちょっとやめろお！ ああああ！ 来るなああああ！ 誰かオタスケエエエエエ！」

もうだめだ。

そう思った時だった。

輝くピンクの光が俺の目に飛び込んできた。

その光が踊り、変態（おとこ）が宙を舞う。

そしてその光に見とれてしまう俺がいる。

俺は、「大丈夫？」と可愛らしい声をかけられた時、ようやくそれが少女だと気付いた。

妖精のような白い足、揺れるミニスカート、すらっとした体、頭にはパンティ、パンティからは美脚ではなく、腰まで伸びたツインテールが揺れている。

その天使のような姿は、俺の時間を止めてしまった。

……… ってパンティ？ どぞどぞーゆーこと??

……いやダメだ。そこには触れちゃいけない！ なんだかそんな気がする。 うん、見なかった事にしよう。

「ねえ」

……… あれ？ そういえば……

「ねえ、大丈夫なの？」

この子、どこかで見たことあるような顔……

「ねえってば！」

「……………あああああああ！… 君は！…！」

「え？」

「さっきの罪人少女だ！！」

「えええ？？」

……………あ、しまった。つい言ってしまった！

……………いや、やっぱりツインテールとミニスカがいけないんだ。
俺は悪くない。

んで、なんでパンティ被ってるんだ？

「まあ……………いや。それよりその右手に持ってる」

右手？

俺は右手に視線を落とす。

まあ、当然右手にはさっき拾ったパン……………

あ

「い、いや、違うんだ。これは、その……………」

「本当にありがとう」

「へ？」

「私のお姉ちゃんを……」

「え？ 何？ どうゆう事？ これお姉さんなの？ ちょっと色々大丈夫？」

「……すつごく安らかに眠顔……」

「どこにあるんだ、顔？ それ以前にパンティは生きてるのか？」

「……お姉ちゃん……うぐっ、後は私がんばるよ……だから……うつく……安心……うっ……して、ね……」

なんか泣いてる……よね。凄いかわいい　　そうだよ。ああ、
うん可愛いそうだよ。

でもさ、知ってるか？ パンティは見られてナンボのもんだぜ。
泣かれても喜ばない物なのだぞ。

……しかし本人が余りにも悲しそうだったので「大丈夫？」と、
とりあえず声をかける。

すると少女は涙を拭い、ぐしょぐしょの顔で頷いてくれた。

……やべえ、超カワイイ

「あなた……えつと……名前は？」

「俺？ 俺は健一だ」

「そう……。そうだ、健一はどうしてここにいるの？」

「うっ……どうしてかと言つとだな……」

流石にあなたを追って来ましたとは言えない……。絶対嫌われちまう。

「いや、女の子に追いかけられちゃってさ。今迷子なんだ」

ちなみにこれは理想像な。

「……そんなにモテるの？ 悪いけどイケメンには見えないよ」

疑いのまなざしが痛い。そして、流石に酷いよ……。グサツときたよ、マジで。

「し、失礼だな。モテモテだぜ、俺。体育の時間とか俺が着替えると、女子がキャーキャー騒がしいんだ。……ホントよ。これはホントなの」

「……まあいつか。そうだ。遅れたけど、私の名前はジミーよ。ふふふ、可愛い名前でしょ」

そう言ってウインクをするジミー。

うう、クソかわゆす。

あ、うん。勿論顔の方ね。名前じゃないよ。

「可愛いよね、名前」とジミーは笑う。

勘違いはなはだしいな。そして君のお姉ちゃんはどこへやら……

まあそれは置いていて、心の中ではミーちゃんと呼ばしていただきます。ごっつぁんです。

「そつだ。健ちゃん」

健ちゃん？　なんか急に親密度アップしちゃったな。まあ可愛いからいいけど。

「この戦争の事どこまで知ってる？」

戦争？　ああ、パンツ戦争の事か。

「俺が知ってるのは、まずパンツの種類別に別れてて、全員が男で、なぜかパンツを被って……。……これは何かの宗教団体が政治団体が関わってる！　と、俺は考える」

どうよ俺の予測は。カッコいいよな。な！　な？

するとミーちゃんは「実はちょっと違うの」と深刻そうに言った。

「えっと……どこから話せばいいかな……」　ミーちゃんが腕を組んで考え込む

うう、かわいいなあ……。まずは君の事から聞かせてよ。

「じゃあこの戦争の基本ら話すね」

「うん……」

そんな事はどうでもいいから君の事が知りたいな。そして俺はヤンデレでもないからな

「まず一つ、パンツ達は生きてる」

「へえ」

「二つ、パンツが人を操っている」

「ふむ……」

「三つ、ブリーフ組は地球征服を企んでいる」

「……そうなんだー」

「……………」

「……………」

「……………信じてないよね？」

「いや、だ、だってそんなファンタジーな世界聞いたこと無いんだもん」

俺がそう言うと、ミーちゃんは「はぁ」とため息をついて「じゃあ見せてあげるよ」と言った。

ミーちゃんは壁に向かって走り出した。

そして飛んだ。

……………飛んだ！？

二十メートル位まで上昇、三回転して急降下。そして着地…………

ミーちゃんが「ねっ」と笑顔を見せる。

「さっき言ったでしょ。パンツが人間を操るって。私もその一人なの。」

「は？ え？ ん？ ……………ええ！？」

極度の放心状態だった俺にもようやく理解出来た。

つまりそれって…………

「その頭に被ってるパンティがその子を操ってるの!？」

「そうなるね」

「はいいいいいい!？」

「あ、バカ! そんな大声出したら」

「おーい、ヤツがいたぞお」

え?　　と思つて、声のする方向を見てみると……

変態がいた。しかも沢山……

パンティちゃんが「逃げるよ、健ちゃん!」と言つと、俺の腕を掴んで走り出した。

しかしミーちゃん走る速度が速すぎたのか、俺はまさに金魚の糞のようにくつついて、そしてこいのぼりの様に揺れている状態となつてしまった。

「時間が無いから今から説明するよ」

「う、うん」と、恐怖感を隠しながらも返事をする。

「さっきブリーフ組が世界征服を企んでるつて言ったでしょ。だから他のパンツ達は彼等を止めようとしてるの」

「そ、そっか。だからミーちゃんは追われてるんだね。……じゃあ俺は?」

「健一は私のお姉ちゃんを見つけてくれたでしょ。でもブリーフ達は、健一をパンティの仲間だと思った。あと私のことは『ジミー』って呼んで」

「……………」

「心配しなくても大丈夫。私の名前がかわいすぎ……………じゃなくて私が守るから！」

優しく、かわいく、そして強い。そんな言葉に安心

「えっ？ キヤアアアア！！」

出来なかった。

悲鳴と同時に、腕の温もりは消え、十メートル程投げ飛ばされた。

しかし、自分でも驚く程上手く受け身がとれたので、大きな怪我は無かった。

しかし振り返ると、ブリーフを被った大柄の変態（おとこ）にミィちゃんが捕まっていた。

腕で首を抑えられている。

足をばたつかせて、必死に逃れようとしていて……………

凄く苦しそうで……

苦しそうなのに……

それでも、「逃げて」と俺に叫ぶ。

そのかすれるような声に胸が締めつけられる。

今ほど自分の無力を呪った時は無い。

その後ろでは、背の高い筋肉質の変態（おとこ）が「これで最後のパンティだあ！」と高笑いをしている。

……？ 最後のパンティ？

「おい、最後ってどうゆう事だ！」

「ははははは。聞いてそのままの意味だろ？ コイツを殺せばこの世からパンティが無くなるんだよ！」

その言葉を聞いたとき、俺の中で何かがはじけるのを感じた。

気づくと、俺は走り出していた。そして俺の拳が変態おとこの顔へと吸い込まれるように放たれた。

「ぐおお！」という声が聞こえて、変態（おとこ）が吹き飛んだ。
殴ってから俺は自分の力がおかしい事に気づいた。

そして変態（おとこ）が吹き飛んだ時に解放されたミーちゃんが
こちらに駆け寄ってくる。

「健ちゃん、その力は……」

「分からない。けど、多分……世界中の漢達おとこが『ギャルのパンティ
おくれ』と叫んだんだろ」

「……………私はそうじゃない事を祈るよ……………。なんか気味悪い」

「ふふふ、なんだこのみなぎるパンティ力は。今ならパンティ玉で
も作れる気がするよ……………」

「お願いだからやめてよ！　なんかイヤだから！」

そんなやりとりの中、あの変態（おとこ）が起き上がって来た。

「く……………人間風情がやってくれるな」

「ふん、何が人間風情だ。全国民の意見を代弁して言ってやろう」

「何い？」

『……そんなことをパンツかぶった変態だけには言われたくなあああ
あい!!』

「な、何だと……くそ、許さんぞ……お前だけは許さあああん!」

そう言うと、変態(おとこ)は両手を俺に向け、訳の分からない言葉を発し始めた。アイツ、実は魔法少女なのか? キチガイのおっさんにしか見えないが……

「健ちゃん! 逃げて」

と、ミーちゃんのかわいい声が聞こえた。

相当危険なのがきそうだ。だがしかし、世界中の漢(おとこ)達のために、俺は逃げない!

詠唱っぽいのが終わると、変態(おとこ)は「俺に操れないパンツなど無い!」と叫んだ。

すると、緑色の光が俺の体を包んむ。

「健ちゃん!!」

「ふっ、ふふふっ、ふっはっはっは。私は全てのパンツを操る事が出来るパンツ王だ! 私の前では全てのパンツが無力だ! さあ、少年よ。そのパンティを捕らえろ!!」

「……クククク。バカめ! 俺にそんな物はきかんぜ!!」

なぜなら俺は……

俺はズボンを解放する

俺の行動に「何だと!」と、目を見開いているパンツ王。

パンティちゃんに関しては「キヤー」と叫んで手で目を抑えている。

へっ、惚れたか?

「と、そんな訳だ。お前じゃ俺には勝てない」

「ふっ、お前は変態(おとこ)の中の変態(おとこ)だな」

「漢(おとこ)の中の漢一と呼んでくれ。さて 行くぞ!」

俺は走り出した。

そう。世界中の男達と平和のために……

「キヤー!」

〔完〕

(後書き)

まずは、こんな駄作を最後まで読んでいただいた皆様に感謝です。

意見、感想などがあれば、どんどんお願いします。

どうかこの僕に愛のムチを……

ライフルどもミサイルでも核弾頭でも、何でも受け止めます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5477m/>

第一次パンツ戦争～仁義無き変態（おとこ）達の戦い～

2011年6月4日15時38分発行